





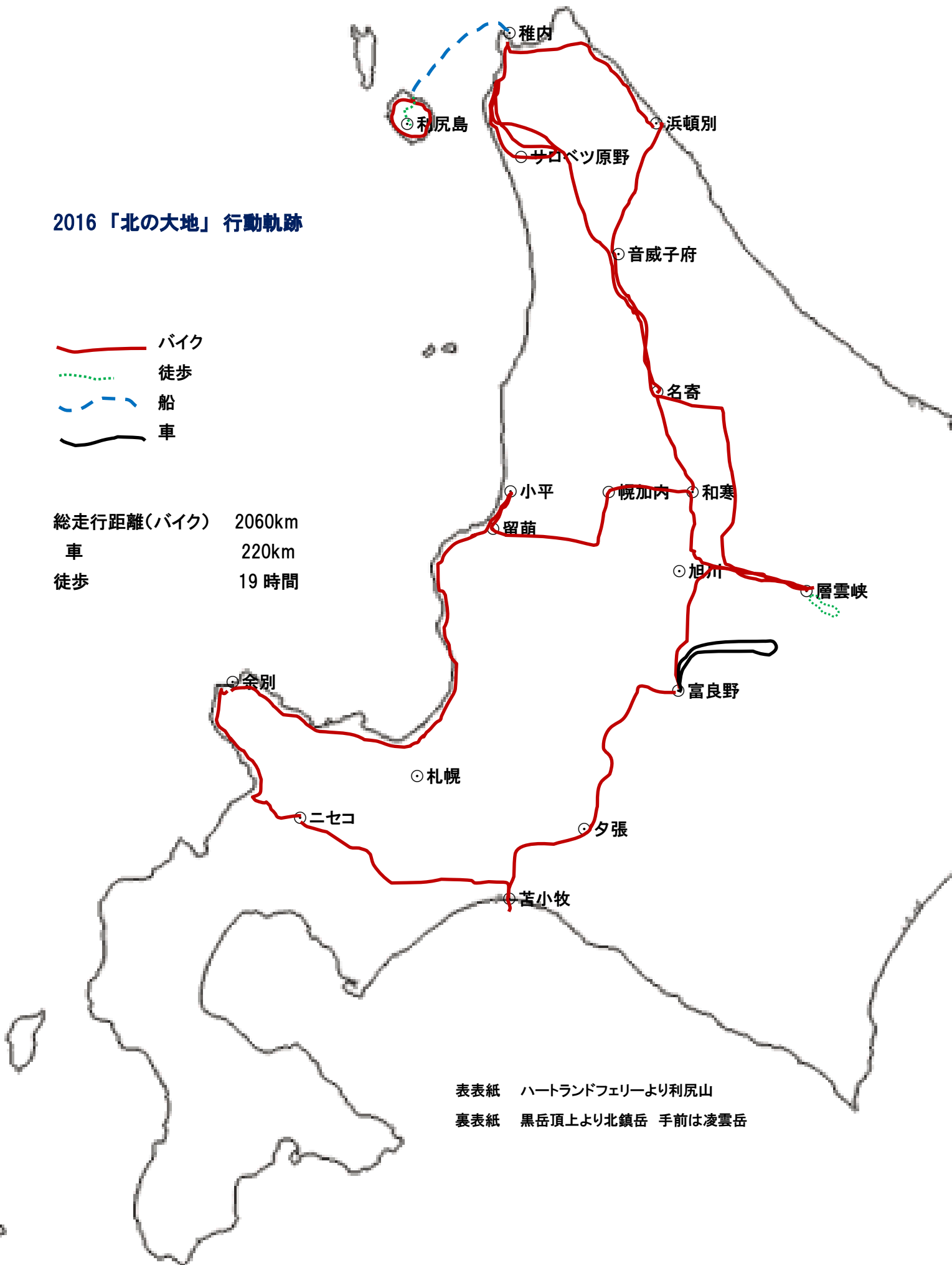


2016「北の大地」—風の記憶—
変わる「北の大地」

2016「北の大地」行動軌跡

-  バイク
-  徒歩
-  船
-  車

総走行距離(バイク) 2060km
 車 220km
 徒歩 19時間



表表紙 ハートランドフェリーより利尻山
 裏表紙 黒岳頂上より北鎮岳 手前は凌雲岳

6月28日(火)

自宅—仙台南部東部自動車道—仙台港フェリーターミナル—太平洋フェリー「きたかみ」～

(25km)

この4月で5年間勤めた非常勤講師を辞めたため、今までのように仕事を休んで出かけるという負い目はなくなり、スッキリとした気持ちで出発することができた。雨模様の天気だったが、雨の切れ間を選んで、少し早目だったがバイクを走らせた。

今日の船は「きたかみ」であるが、他の船は早割の半額の特典をなかなか取れないからである。「いしかり」と「きそ」は新造船で、船内が新しく綺麗で人気があるため、発売開始日に予約を取ろうとしても既に一杯になっているのである。最近では大型船の船旅を楽しむ旅行者が多いので、旅行業者がまとめ買いをしているに違いない。「きたかみ」のような古い船は、そのような旅行者には敬遠されるので、往復ともに半額の特典を取ることができた。仙台と苦小牧間のほとんどの時間は寝ているので、船内が古くても問題はない。ただ、レストランの内容が以前と比べると格段に落ちてきた。昨年もおいしくなかったもので、どうしようかと思案しながら入口に来てみると、今までなかった券売機があった。簡素化を進めるのもいいが、人と人との関係も薄れていくような気がしてレストランに入るのは止めた。カフェバーで生ビールと軽食にしようと思ったら、営業時間が今までより1時間も遅れているし、こんなところも券売機になっている。船内売店で缶ビールとおつまみのようなものを買って夕食がわりに済ませた。レストランでこれからの旅のことを考えながら赤ワインを飲むのも良かったが、ロビーの椅子で、明日以降の行動計画を考えながらノンビリ寛ぐのもなかなかよいものだ。今回も3泊4日の縦走を計画しているが、天気に左右されるので天気予報が気がかりだ。スマホの1時間ごとの天気予報は非常に助かるが、山の上の天気となると難しい。毎年そうだが、今回も行き当たりばったりで判断して決めていくしかない。

6月29日(水)

苦小牧フェリーターミナル—R234—追分—R274—新夕張—D38—夕張—R452—D135—富良野

ロッジ・アイガー (198km)

苦小牧フェリーターミナルから少し走ったところのガソリンスタンドでいつものように満タンにした。以前、このスタンドはセルフでなかったのが、給油をしながらその年の北海道の様子を聞いたりしたものだが、今はガソリンを入れるだけの機能でしかない。

勇払原野を北上し、追分から夕張に向かった。道の駅夕張とは名ばかりで、中に入るとただのスーパーマーケットと変わらない。昼飯を食べようと思ったが、外にある屋台の焼きそばしかない。カットメロンもあったのでそれも食べたが、合計1000円は少し高い。東京都庁を辞めて夕張再興のために頑張っている市長、給料カットの職員、公共料金の値上げなどにもめげずに頑張っている市民のことを考えると、お金を使うことが支援につながると思い、財政破綻した夕張の支援の一助にでもなればという気持ちで食べた。

夕張メロンコーナーでは、現在のようなおいしいメロンになるまでの経緯を紹介したプロジェクトXのビデオを見ることができた。一人の農業技術者を中心に、生産者と消費者の信頼の絆を深めていった結果として「夕張メロン」が誕生した。石炭で賑わっていた町は石炭という「黒いダイヤモンド」の代わりに、夕張メロンという「赤いダイヤモンド」に望みを託した。

数年前に食べた夕張のバリ屋台村のカレーそばが食べたくなかったので行ってみたら、その当時と全く同じ作りまだった。昼過ぎという時間もあつたが、数軒の屋台をあわせても客は3名ほどだった。カレーそばのカレーは以前と変わらぬ味だった。夕張名物にあげているだけのことはある。



バリ屋台村

新しく規模を大きくしたシューパロダムにより、以前走ったことのある国道452と閉山のために消えた街の遺跡も湖底に消え、地上から完全削除されてしまった。雨の心配もないし、暑くも寒くもないし、対向車は忘れた頃にくるといふ50k以上民家も何もない夕張国道を、我が物顔に大排気量の排気音を響かせて走り抜けた。

早めに富良野に着いたので、馴染みの釣具屋に寄ってみた。相変わらず閑散とした店で店主は暇そうにしていた。毎年この時期に訪れる自分のことを覚えていて、「去年は餌を切らしてごめんな」と声をかけてくれた。富良野近辺の釣りはあまり芳しくないとの情報だった。原因は稚魚放流を止めたためのようなのだ。漁協が稚魚を放流しても、稚魚のうちに根こそぎ釣って持ち帰る釣り人のため効果がなくなったかららしい。その代わりに、自然交配が可能な遺伝子を持ったニジマス(ニジマスは自然交配ができなかった)を放流したので、その子孫が増えることを期待していると言っていた。そういう状況のなかで期待出来るのは忠別川と美瑛川だと教えてくれた。富良野のロッジ・アイガーには余裕の時間で到着し、暫くぶりの佐藤さんとしばしお喋りをして再会を喜んだ。

6月30日(木)

ロッジ・アイガー—D759—D581—D70—D580—R452—D68—D294—D1160—D213—忠別川
—D213—D1160—D294—D68—R237—美瑛五稜線—五稜橋—D580—D70—D581—D759
—ロッジ・アイガー

ロッジ・アイガー 【220km】

北海道のヘソで釣り

今日は1日釣りの予定でいたところ、アイガーの浩明さんが「車使っているよ」と言ってくれた。釣具屋から忠別川と美瑛川が良いと聞いたものの、ピンポイントで聞いたわけではないので、自分で探さなければならない。地図を見て、川の流れと道路からの距離などの地形を頭に描きながら探さなければならないが、それを大型バイクでやるのは疲れる。ありがたく車を借りることにした。バイクだと釣り道具などのパッキングがいちいち大変だし、バイクの悪戯なども気にしなければならないのだが、車だと車内に入れておくだけでよいので助かる。このポイント探しも釣りの楽しみの一つだ。川の流れの雰囲気を見て、今までの釣りの経験からの知識を総動員して判断するのだが、そのようにして釣った一匹の喜びは大きい。

忠別川は何度も川沿いを走っているの、予め決めていたポイントに行ってみると先行者がいた。その少し下流にも良いポイントがあったので、車を止めて釣り支度をしていると、後からやって来た若者がサッサとポイントに入ってしまった。ルアーマンのようだ。しばらく見ていたがなかなかヒットしない。このポイントは大場所だから大物もいる可能性はあるが、このカンカン照りの日中では魚も警戒して出てこないようだ。しばらくして若者は「水量がいつもより少なくて全然出てこない」と言って帰って行った。自分は、今日の釣りは時間的に日中のカンカン照りの釣りになることを予想して、餌釣りの用意をしてきた。ルアーマンに荒らされたポイントを鎮めるためにも、ユックリと準備を始めた。川の中は水量のある速い流れで、深さもありそうだ。そこへ左から別の流れが合流して複雑な流れを形成していた。セオリーどおり手前の流れに餌を乗せたが、予想外に手前に流されてしまった。次に流心近くに投餌して深めに流すとすぐにアタリがあった。アワセをくれると確かな手応えが本流竿の長竿を通じて伝わってきた。魚は流れに乗って走り始めた。竿を立てると満月に絞り込んできた。以外と大きいようだ。数分のやり取りの後、あがってきたのはニジマスだった。引きのわりには魚体は小さい。ハリは上顎にしっかり刺さっていたので、ハリだけを持って魚体に触らずリリースすることができた。次に来たのは更に強い引きで、竿を垂直に立ててしばし耐えた。何度かジャンプしてあがってきたのは40cmあるかないかのサイズだった。この魚は強い流れの中で育っているためか、魚体のわりに引きが強いようだ。一つのポイントで6匹も立て続けに釣れてきた。そのうちの一匹がニジマスの変種のホウライマスのようなようだ。旅から帰ってから、旅の思い出に耽りながら食べるために、2匹だけ持ち帰ることにした。

午後は美瑛川で釣ることにした。地図を見て、川と道路が近づいている場所に見当をつけて走ると、予想通りのポイントを見つけることができた。この美瑛川は忠別川と違って、川岸から鬱蒼とした密林になっているところが多い。従って、熊の脅威から逃れるためには橋の近くか、道路の近くが安全だ。幾つかのポイントから、時間的にも1カ所に絞りこんで釣ることにした。川の雰囲気は忠別川よりも好きだ。期待を込めて第一投を試みた。すぐにアタリがあったが、合わせられない。アタリの様子から小物のような感触が伝わってきた。そのうち釣れたが、やはり20cmオーバーの小型だった。

場所を少し移動して川面に木々が覆い被さっている釣りづらいポイントに流すと、確かな手応えがあったが、中型ばかり続いた。30cmはあるものの、川の雰囲気からはもっと大物が潜んでいるようなのだが、暗くなってきたので時間切れで止めたが、美瑛川は今後魅力ある釣り場となりそうだ。

【忠別川のニジマス】



夜は「雑」に行った。去年の冬合宿が中止となり、2月に予定していた雪の造形の撮影も悪天候の連続で行くことができなかったので、一年ぶりとなってしまった。富良野に来て、10数年間飲み続けてきた「さそり」が品切れとなり、同じような焼酎を頼んだ。しばらく飲んでから後ろに何やら気配を感じたので振り向くと、20数年前に、初めて富良野でスキー部の合宿を行ったときに大変お世話になった先生がニコニコ顔で立っていた。転勤で富良野に戻ってきたのは知っていたが、ママの友紀さんが呼んでいたのだ。合宿の時は、自分はスキーの素人であることもあって、自分のチームの選手も面倒を見て頂いた先生である。そのお陰で我がチームからもインターハイ選手が生まれたりした。その後、何度となくこの店で飲んだりはしていたが数年ぶりの再会だったので嬉しかった。定年間近とは思えないくらい若く、以前と変わらない雰囲気だった。校長になっても、毎朝正門に立って生徒を迎えているそうだが、この先生の優しい人間性の一面だろう。久しぶりの話し合いのため、つつい酒のほうも進んでしまったのは言うまでもない。友紀さんもチホも元気でなによりだった。



富良野・「雑」

7月1日(金)

ロッチ・アイガー—D759—六花亭—759—富良野釣具屋—D759—D581—D70—D580—R452—D68—D37—D140—とうまオートオアシスPA—R39—層雲峡温泉 層雲峡YH (142km)

去年までは、縦走登山の場合、バイクはロッチ・アイガーに置いてバスで往復していたが、今年は旅の日程が短いこともあり、バイクで登山口まで行くことにした。これにより二日間日程が浮くことになる。そのため、今回はバイクに積む荷物がかなり多くなった。今後の行動計画をもとに入念にパッキングを行って出発した。

層雲峡に行く前に、春日、関水両氏にメロンを送るために国分農園に行った。タイミングの良いことに今日が今年の初収穫だった。期待していたとおり、赤肉と青肉のメロンをご馳走になった。



荷物満載のバイク



富良野・国分農園

このメロンは本当に美味しいが、去年もそうだったが二日酔い気味の場合は濃厚な味の赤肉メロンより、サッパリとした甘味の青肉メロンが美味しく感じられる。贅沢だなあ。今年は5月6月の異常低温のため、農作物の植え付けが遅れて、まだ作付けができなくて空いている畑もあると国分さんはぼやいていた。と言うことは、山の雪解けも遅れているということになる。このラブラドールは本当に人懐っこくすり寄ってくる。毎年来るので分かっているのだろうか。



ギャラリー「神々の遊ぶ庭」

次の目的は、ワイン工場の近くにある六花亭ギャラリーで開催中の写真展を見るために、ブドウ畑の丘をバイクで登った。仙台を立つ前に知り合いから教えられたのだが、こんな所にこんな素敵なギャラリーがあるとは知らなかった。

そのギャラリーは、十勝岳連峰が見渡せる丘陵地帯のブドウ畑の中にあつた。日本離れた雰囲気のレストランだ。六花亭とギャラリーとジンギスカン料理の三棟が、適当な間隔で統一された雰囲気で建つてあつた。ギャラリーにすぐ入つたが、他の二棟が観光客で賑わっているのにここは閑散として静かだつた。自分以外一人しかいなかったが、その人もすぐになくなったので、一人静かに鑑賞することができた。イタリアのドロミテの山岳写真であつたが、四角いギャラリーの一辺が全部ガラス張りで、十勝岳連峰が額縁の中に収まっているように見えたが、その迫力に圧倒されてしまった。展示している写真も悪くはないが、この迫力には到底かなわない。ここで展覧会をする場合は、この特異なギャラリー空間を頭に入れておかなければならない。

お昼の時間となり、腹がへってきたので、隣のジンギスカン料理の「白樺」に行った。結構混んでいたが何とか空席が見つかったので、ラム肉を頼んだ。生のラム肉で、これが以外と旨かった。ここ何十年と来ることはなかったが、今後は来る回数が増えるかも知れない。

釣具屋に、昨日釣った魚がホウライマスかどうか見てもらうために行き、デジカメを見せたら、「レインボウは無いが、黒点が多すぎるので完全なホウライマスではないようだ」と言い、「それにしても、去年もそうだが、なかなかウデがいいね」と褒められた。リリースの仕方、早合わせをして、ハリを飲み込ませないようにして、魚体に触らないようにリリースしたことに感心して、「それは理想的なリリースだ」と、またまた褒められた。「アワセが遅れてハリを飲み込まれた場合は、無理にハリを外そうといじくりまわすより、ハリスを切ってやった方がよい。ハリは魚の肉が盛り上がりてきて自然と外れるのだ」とか、一見無愛想な店主だが、話し始めると止まらない。



ジンギスカン料理・白樺(左) ギャラリー(中央) カンパーナ六花亭(右)

当麻のロードオアシスに立ち寄ったら、松田さんが相変わらず元気な明るい笑顔で迎えてくれた。バイクで走っているときは良いが、止まると暑さが応えるような日だったので、トムロコシアイスを食べながら、例によってとりとめのないような話しをした。こんな場所での、この一時がバイク走行の疲れを癒やしてくれる。二年ぶりだったので、記念写真を撮ろうとしたら、「もう歳だからあ」と頑なに拒否された。小学生の孫がいるようには見えない若さなのだが。

国道 39 号は何度も石狩川を渡るのだが、その度に川の上下を見ると、下流域にも大物のいそうなポイントがあることがわかった。フライで釣るには絶好のポイントもあった。

層雲峡ユースには 4 時半に着いた。相変わらず人の良さそうなペアレントが「お帰りなさい」と迎えてくれた。部屋には先客三人がいたが、そのうちの一人は、定年を迎え、旨いものを食べる旅を二週間してきたので、そろそろ帰ろうかと思っていると話していた。最近のユースホテルには、若者ではなく、定年後の人

達が思い思いの旅を楽しむために利用している。しかも、ほとんどが一人旅である。自分もそうだが、この人達も貸し切りバスに乗っての旅行などは思いもつかないだろう。ここのユースの食事は相変わらず素晴らしい。一人ずつ料理を用意してくれるので、温かい料理は温かいまま食べることができるのだが、これは大切なことだ。予定では明日が縦走出発日だが、ここ数日間は天候が悪い。回復を待つことにして、明日は釣りでもしよう。

7月2日(土)

層雲峡YH—石狩川小函付近—流星の滝下流—層雲峡YH…層雲峡ビジターセンター…層雲峡YH
層雲峡YH (19km)

石狩川上流の釣り

今日は午後から雨の予報なので、午前中に釣りを終えておくことにして、層雲峡の長いトンネルを抜けたところにあるポイントへ走った。数年前にここのポイントを見つけて、崖を降りたときは踏み跡もなく、恐る恐る降りて水の色を見た時、絶対いるはずだという確信を持って竿を出した。そして、初めて40cmオーバーを釣り上げた所である。ところが、その後誰かが降りやすいようにとロープを張ったら、たちまち場荒れしてしまった。今日は三年ぶりだが、ロープはなくなり踏み跡も無くなっていた。

かなりの水量のため流速が速く、ポイントは狭められていたが、確信をもって流れの筋に餌を入れると、すぐさま目印が変化したので軽く合わせると魚はビックリしたように走り出した。しかし、以外に諦めが早い。この場所は頭上の木々が邪魔で竿を立てられないので取りこみが面倒だ。釣れてきたのは良型のニジマスだったが、ニジマスにしてはあまりファイトしない。次から次へと入れ食い状態だが、いずれにしても引きが弱い。ニジマスの他にアメマス、オシヨロコマも釣れてきた。オシヨロコマの朱点は何度見ても神秘的で艶めかしい。今回は全てリリースしたが、ハリが全て口辺に刺さっていたので、魚には触らずに放すことができた。魚は元気に泳いで行った。流星の滝などの観光スポットの下流までバイクで移動し、以前の記憶のポイントを攻めたが、ここもオシヨロコマが入れ食い状態だ。しかし、40cmオーバーは出そうもないので川からあがることにした。



石狩川上流部のオシヨロコマ



石狩川上流のオシヨロコマ



層雲峡ビジターセンターに行って、最新の山の情報を見たら、何と、今年は例年になく雪が多く、花も遅れているようだ。予定している銀泉台からのコースも大半が雪に埋もれ、白雲岳CSは完全に雪の下で、雪上設営になるらしい。この状況下ではガスがかかったら道に迷う可能性が高くなるし、赤石川の徒渉も危険だ。愛山溪への初めてのルートへの不安もあるので、今回の縦走計画は中止にすることにした。そして、最北の名峰・利尻山に目標を切り替え、天候と日程次第ではまた戻ってきて、黒岳から愛山溪への1泊2日の縦走をすることにした。夕方から激しい雨になった。明日も北の方は天気が悪いようなので動かない方が良さそうだ。ここのYHも外国人が多いのだが、明日は台湾からの団体で満室のため、近くの安いホテルを予約した。

7月3日(日)

層雲峡YH-R273-三国峠-十勝三股-糠平湖-R273-層雲峡温泉

ホテル雲井 (121km)

ルピナスはどこへいった

今日も天候が不安定なので、近場を走ることにして、三国峠を越えて十勝三股のルピナスを見に行っただが、目を疑った。一面ルピナスの群生地だった所には、申し訳程度にしか生えていない。繁殖率の異常に高い外来種だから、在来種の保護のために駆除されたのだろうか、と思った。ログハウスの三股山荘でコーヒーを飲みながらオーナーに聞いたところ、気候が暖かくなってきたせい、2, 3年前から自然と消滅してきたと言っていた。この地に開店してから31年目で、ルピナスが消えてしまったと嘆いていた。ルピナスは元来カナダなどの寒冷地の植物で、北海道の気候に適していたので繁殖したのだが、気候の変化により、適地ではなくなった証拠なのだろうか。その代わり、コーリタンポポとショウブが花盛りだった。写真を撮りに来たという人も「前はルピナスがビッシリだったよなあ」と、その変化に驚いていた。

タウシュベツ・アーチ橋も今では近くまでは行けず、遠くから眺めるしかないが、この時期はダム水位が上がって、水没寸前だった。以前は国道から砂利道の林道を必死に走り、橋まで行って、ノンビリと昼飯を食べたものだが、良い思い出となってしまった。今では、ガイド同行でないと、林道の入口のゲートから入れないとのことだった。とにかくこの周辺は熊の出没が多く、事故防止の意味もあるらしい。

廃線となった旧国鉄士幌線の軌道跡地を利用したトロッコも健在だったので、ノンビリとペダルをこいで原生林の中を走り、当時を思い巡らした。



2016年の十勝三股 ルピナスは1本もない。



2008年の十勝三股

手前の道は同じで
両側はルピナスで覆われていた
遠景の建物も同じ



2008年の頃はこのように一面ルピナスで、背丈も1m以上あった



2016年は水路の周辺部とかに残るのみとなってしまった



ハナショウブとルピナスの混成地でエゾシカがこちらを伺っていた 鹿は毒草のルピナスは食べない



以前はあまり見られなかったコウリタンポポの群生



タウシュベツアーチ橋 水没寸前



旧国鉄士幌線跡を利用したトロッコ列車軌道



国道から見える旧士幌線のアーチ橋



これより三国峠へ続く、白樺林とルピナスに彩られた糠平国道

7月4日(月)

層雲峡温泉—R39—愛山上川IC—旭川紋別自動車道—比布ジャンクション—道央自動車道—
士別剣淵IC—R40—名寄—名寄北IC—名寄美深自動車道—美深北IC—R40—音威子府—
R275—D647—D120—中頓別—R275—浜頓別 浜頓別温泉ウイング (217km)

朝から雨が降っていたが、天気予報を信じて、予定より少し遅らせて出発したおかげで、上川から道路は乾燥路面になっていた。バイク走行では、路面が乾いているかどうかで疲労度が全然違う。時間を稼ぐために愛山上川ICより高速に乗った。雨はあがったが風が強い。バイク走行においては、強風もかなり神経を使う。特に横風の場合には危険だ。北上するにつれ気温がどんどん下がってきた。出発するとき、低温予報が出ていたので、インナーダウンの上下を着て、ライダーズジャケットの上にレインコートも着ていたが、寒くて震えがくるし、指先がかじかんできたので、コンビニで休憩をしながら暖かい飲み物を飲んだ。ホッカイロがないか聞いたが、さすがにこの時期はないようだ。音威子府近くでまた雨が降ってきたので、道の駅に入り昼食をとった。音威子府もソバが名産で、「黒いソバ」というのがあったので頼んだら、本当に黒いソバが出てきた。冷え切った体にはすごく美味しく温まった。そば殻も一緒にひいたから黒いソバができるのだと言っていた。

砂金掘り体験という看板が見えたので、一攫千金を狙ってみようと思ったら、夏休みだけの企画だった。この界隈は砂金採掘で有名な所である。

雨はまだ降っているし、道路の温度標示は10度を示しているのに、目的の猿払まで行く気力が萎え、温泉で温まりたくなかったので、浜頓別温泉で泊まることにした。ここは公共の宿だけあって、この近隣の日帰り入浴の人達で賑わっていた。夕食には毛ガニがまるまんま出てきたので、時間をかけて丁寧に綺麗に食べた。フロントの人が、「今年は、普段見かけないような所まで熊が出没しているから気をつけるように」と言っていた。すぐ近くの「ベニヤ原生花園」も熊の出没が多く、立ち入り禁止になっているし、明日、走る予定のエサヌカ線も熊が出ているらしい。ベニヤ原生花園もエサヌカ線も海岸に面しているのだが、熊は塩をなめるために来るのだと言っていた。しかし、今までは地元の人も見たことがなかったらしいが、山中にある岩塩供給地が枯渇したか、苦勞して探すより海岸でなめたほうが簡単だということが分かったからかも知れない。



空に舞い上がるエサヌカ線の直線道路は、紆余曲折に満ちた人間を惹きつけて止まないものがある

7月5日(火)

浜頓別温泉—R238—エサヌカ線—R238—猿払—D1077—R238—稚内フェリーターミナル～
ハートランドフェリー—利尻島・鷺泊フェリーターミナル—D105—杓形—見返り台公園展望台—杓形—オ
トマリ沼—鷺泊港 「ゆ～に」キャンプ場 (156km)

ライダー憧れのエサヌカ線

雨もあがり、薄曇りの天気のもと、国道から分かれて間もなくの林間を、熊に怯えながら走ったが、開けた牧草地帯に出ると一安心した。このエサヌカ線も有名になったわりには、バイクと会ったのは1台だけだった。国道からの入口に標識も無いので分かりづらいからだ。約5kmの直線路を、最初はスピードを抑えて、写真を撮りながら往復し、最後は法定速度をはるかに超えるスピードで走った。人はなぜ直線に惹かれるのか。水平線以外に、このくらいの直線を見る機会はほとんど無い。国道12号線に日本一の直線道路(29.2km)があるが、5kmたらずのこのエサヌカ線に及びもつかない。人工物が無く、ほぼ左右対称の風景を切り裂くように伸びる道路が、空に舞い上がり溶け込んでいく様は他では見られない。センターライン上に立って眺めた時の、緊張感に溢れた幾何学模様は、曖昧模糊としたことしか考えられない人間を寄せ付けないような厳しさを持っている。理屈抜きに、曲がっていないから、紆余曲折に満ちた生き方の人間には、惹きつけて止まないものがある。

それにしても寒い。猿払の気温は10度である。当初の予定では、ここのキャンプ場に泊まる予定だったが、寒くて寝られなかったかもしれない。猿払道の駅で体を温め、宗谷岬をバイパスするD1077の快適ロードを走ったら、予定よりかなり早く稚内フェリーターミナルに着いてしまった。フェリーターミナルは新しくなり、勝手が分からず慌てたが、新造船のフェリーに一番で乗り込むことができた。出港してすぐに利尻島が望まれるほどに天気は回復してきた。予報ではこの三日間は天気が安定しているので、利尻山登山が楽しみである。鷺泊港も新しくなり、その前の商店街も綺麗になったが、以前のような離島の情緒が無くなってしまった。コンビニでおにぎりを買って、利尻山の眺めの良い所でお昼を食べた。一周しても50kmなので、



杓形の利尻山展望台まで登ったりしながらノンビリと走った。オトマリ沼には観光バスが数台止まっており、観光客でごったがえしていたので、写真だけ撮って早々に退散した。鬼脇の部落を通るたびに、50年前、今は廃道になった鬼脇コースを登ったことを思い出し、よく登ったものだとつくづく思った。

ハートランドフェリーから利尻島



オトマリ沼より利尻山



仙法志より利尻山

今宵は、登山口に近い「ゆ〜に」キャンプ場のバンガローに泊まることにして、夕食にウニ丼を食べるために港まで降りた。ウニ丼4500円はあまりにも高いが、今後食べる機会も無いかも知れないと思い、大奮発して注文した。時化がやんで、今朝水揚げされたばかりのバフンウニとムラサキウニの盛り合わせのウニ丼

が運ばれてきた。以前は2段重ねでウニが入っていたが、今は一段だけである。黄色の濃いバフンウニは、口に入れた途端、久しく食べていない濃厚なウニの味が口の中一杯に広がった。ただ、残念なことに、ご飯の炊き方が悪く、堅すぎた。ふんわりとした腰のあるご飯で食べたかった。キャンプ場の目の前に利尻富士温泉があり、バンガローの中も綺麗だった。ただ、管理人の対応が無愛想なのが気になるが、人は良さそうだった。明日の登山の準備をして、早々と寝ることにした。



この次食べる機会があるかないか分からないウニ丼、濃い黄色がパフウニ

7月6日(水)

「ゆ〜に」キャンプ場ー登山口…甘露泉水…長官山…利尻山…長官山…甘露泉水…登山口
ー「ゆ〜に」キャンプ場

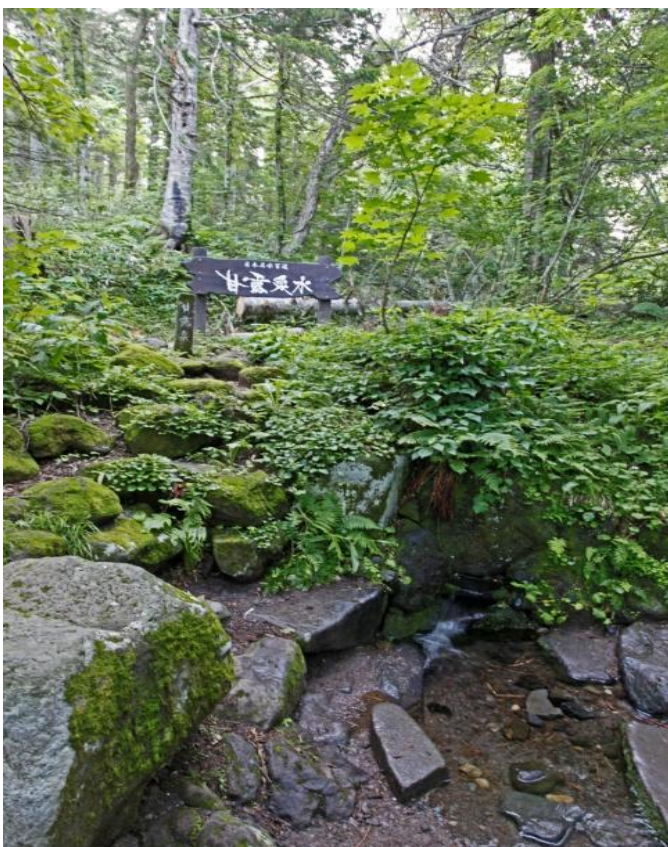
「ゆ〜に」キャンプ場 (12時間)

利尻山登山 リシリヒナゲシとポタンキンバイ

予報どおり、これ以上ない快晴。利尻山は標高1721mだが、登山口の標高が260mなので、標高差1500mを登らなければならない。大雪山の山々でも登山口が700m～1100mと高く、1500mも登る山は少ない。特に利尻山は9合目からの難所があるので覚悟して登らなければならない。登り始めてすぐの所に甘露泉という名水があるのだが、この上には水場はないのでここで水を汲むことにした。こんな小さな島なのに、山麓には見事な原生林が広がり、直射日光を樹林が遮り、快適な登りが続くのだが展望がきかないので飽きる。長官山まで登ると、今まで全く見えなかった利尻山が突然目の前に聳えてきた。東大雪にあるニペソツ山の天狗平からの景観を彷彿とさせる演出だ。頂上付近は痛々しいくらい崩落が進んでいるが、そのへりを登らなければならない。体力に自信のない人は、ここで利尻山を眺めて帰る人もいる。少し先に赤い屋根の避難小屋があるが、そこから頂上までタツプリ2時間はかかる。避難小屋を過ぎると一気に

勾配のあるガレの登りとなり、また、高山植物のお花も多くなる。それらの写真を撮りながらユックリと登った。前方のガレ場で一人の男がしゃがみ込んでしきりに写真を撮っていた。リシリヒナゲシだった。ポタンキンバイと同じく利尻山の固有種である。丁度開花したばかりのようで、薄い黄色の可憐な花びらは、透明感に溢れたシルクのような花だった。結局、後にも先にも、この一株しか見ることができなかった。痩せ尾根を登って行くと、少し離れた所にポタンキンバイの独特の濃い黄色を見つけることができた。しかし、以前と比べると絶対数が少ない。それに、前は登山道のすぐそばから群生していたのに、かなり離れた所にしか見られない。リシリヒナゲシもポタンキンバイも盗掘の被害を受けているのだ。広角レンズしか持っていなかったため、近くまで行って写真を撮りたい衝動に駆られたが良心が止めた。少し登ると、登山道のすぐ傍の背丈のある草の中に、接写できるくらいの距離でポタンキンバイが二輪だけ咲いていた。緑の葉をバックに濃い黄色の大きめの八重の花びらが一際映える。ハクサンイチゲも頂上が近づくにつれ多く見られるようになった。大雪山の大平原の彼方まで覆い尽くすハクサンイチゲとは違い、急峻なガレ場を彩る白い花は、周りの無味乾燥な岩場の茶色の世界で一際光り輝く。

頂上直下の崩落した登山道を覚悟していたが、地元山岳会の人達の努力もあって整備が進み、以前より登りやすくなっていた。近い将来、鬼脇コース同様に登山禁止になるのではと思っていたが、これで少しは延びるだろうが、整備された上に崩落が積もれば、またまた登山者を苦しめる難路となるだろう。地元山岳会の努力に感謝である。7時間かけて頂上に立った。洋上の独立峰だけあって、頂上からは遮るものは無く、日本海に浮かぶ礼文島を見下ろし、対岸のサロベツ原野も望まれ、足下の鴛泊港、杓形港をはじめ、



利尻島の海岸線を一周して眺めることができた。頂上はどんどん狭くなってきており、以前と同じ祠も朽ちかけてきていた。そのうち、頂上そのものが崩落してしまうのではないだろうか。頂上でおにぎりを食べながら、50年前の鬼脇コースから南峰への登山を思い出し、あんな難コースをよく登ったのだと感慨無量になった。頂上から鬼脇コースの方角を見ると、崩落によって形成された奇岩による険しい山容は以前と変わりなかった。ローソク岩や、頂上付近を覆い尽くすハクサンイチゲの群落は見事で、南峰も目の前にみえるが、今は立ち入り禁止のロープが張ってある。記憶の中の南峰は、最後の頂には鎖で登ったのだが、ガスが濃く景色は見えなかった。今回は1時間程頂上にいたが、珍しく風もなく、寒くも暑くもないので、いつまでもこの空気を吸っていたくなり、去りがたかった。

名水 甘露泉水

それにしても、なぜこんなに山に登る人が多いのだろうか。それも、中高年の人が圧倒的に多く、とりわけおばさん達が多い。若い人達は仕事をしているからということもあるかも知れないが、数組しか会っていない。口の悪い人は、ローソクの灯火の最後の輝きと同じと言うが、ある意味言い得ている。自分が写真を撮っている傍らを、息を切らしながら登って行く登山者が多いが、どうしてそんな苦しい登り方をするのだろうと思う。頂上に取り憑かれたように一心不乱に登って行く様は、自分の目からは異様に見える。なぜ、もっと道草をしないのだろうか。そうすれば、いろいろと見えてくるものも多くなると思う。自分は登りながらの自問自答の繰り返しで、自分が生きていることの確認作業みたいなものをしている。歳を重ねて、体がいうことをきかなくなって頭だけ冴えても、あるいはその逆でもバランスのとれた生き方とは言えない。頭と体のバランスシートの確認に他ならない。そんなことは、わざわざ登山をしなくても普段の生活の中で考えられるものだが、登山という命を賭けた、非日常的な世界に自分を置いてみると、丸裸になった自分の醜い姿を客観的に見ることができるからである。また、登山は浄化装置のようなもので、自分の体内に沈殿している色々な毒素、ストレス等を適当に浄化してくれるので、下山後、肉体的疲労は勿論あるが、体と頭が軽くなる。そんなことを考えながら歩いていると、時間はどんどん過ぎて、登ることの辛さはあまり感じない。よく百名山に登ることを目標にしているのかと聞かれる場合があるが、自分にとっては興味ないことだ。他人が選定した山より、自分で選んだ魅力ある山は何度でも登りたくなる。

下山後の温泉は最高の達成感に包まれる一時である。特に、キャンプ場の前の利尻富士温泉の露天風呂からは、夕陽に映える利尻山の頂上付近が望まれ、湯に浸りながら今日の山行を振り返ることができた。

歩き始めて間もなくの原生林
こんな小さな島なのに深い森がある



50年前に同じような場所で撮ったもの
偶然にも自分の「目」が同じような被写体に向いていたこと、人の感性はあまり変わらないものだと思う



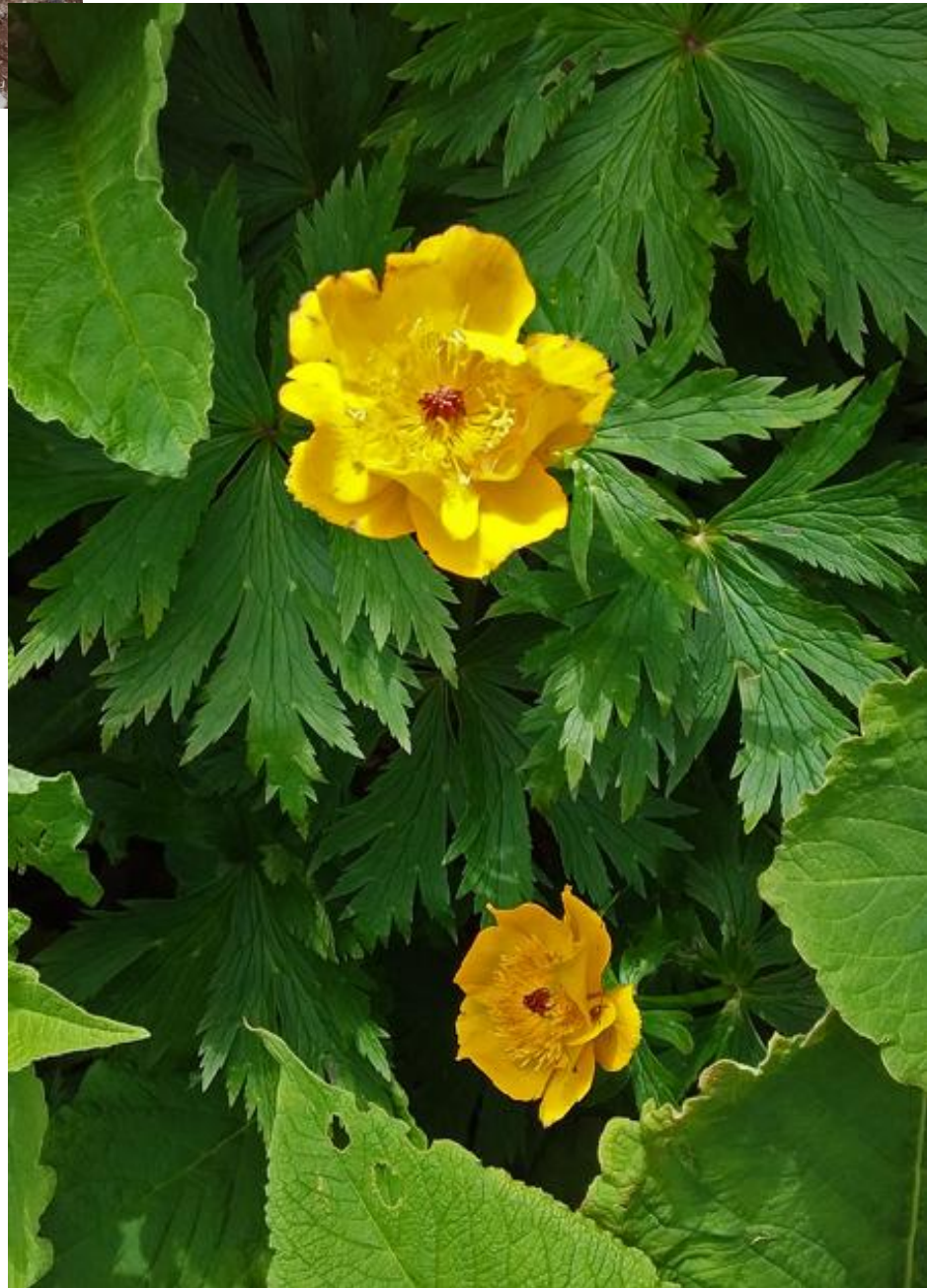
長官山まで来て初めて利尻山山頂が眺められる 右下の赤い屋根は避難小屋で、ここから頂上まで2時間以上かかる難所が待っている 実際の頂上はまだ見えない 最近崩落した山肌が痛々しく見えるが、登山道はその左側を登る



利尻山固有種 リシリヒナゲシ



まさに、ここからが正念場だったが、高山植物の花も多くなり、辛さはなかった



利尻山固有種 ポタンキンバイ



大ぶりのハクサンイチゲが花盛りだった 頂上はまだ先だ



浸食された登山道の補修整備
地元山岳会の努力に感謝



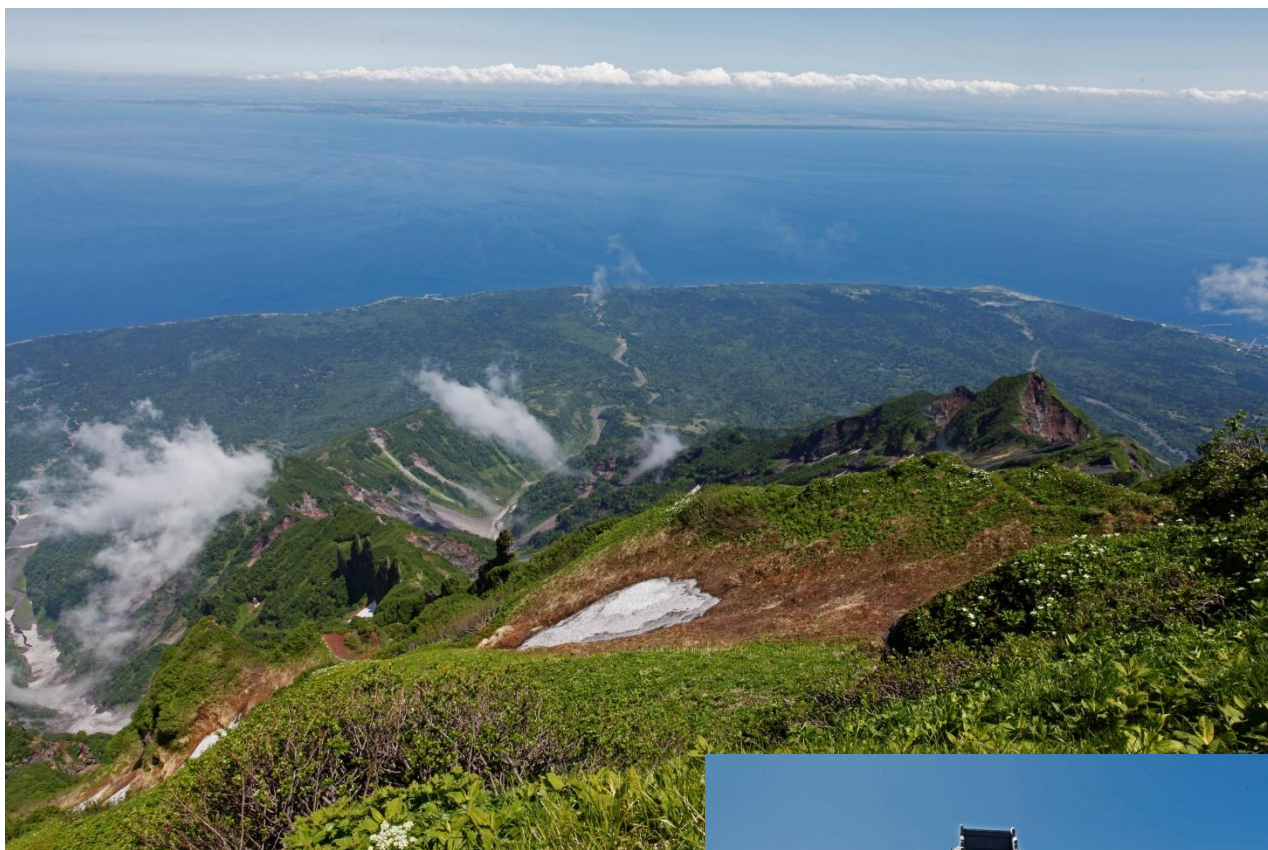
整備される前は、3歩進んで1歩下がる、歩きにくい尾根道だった



やっと頂上が見えてきた。風の強い時は緊張する 両側は絶壁だから。右はローソク岩



頂上の祠。50年前はなかったが、10年前はあった

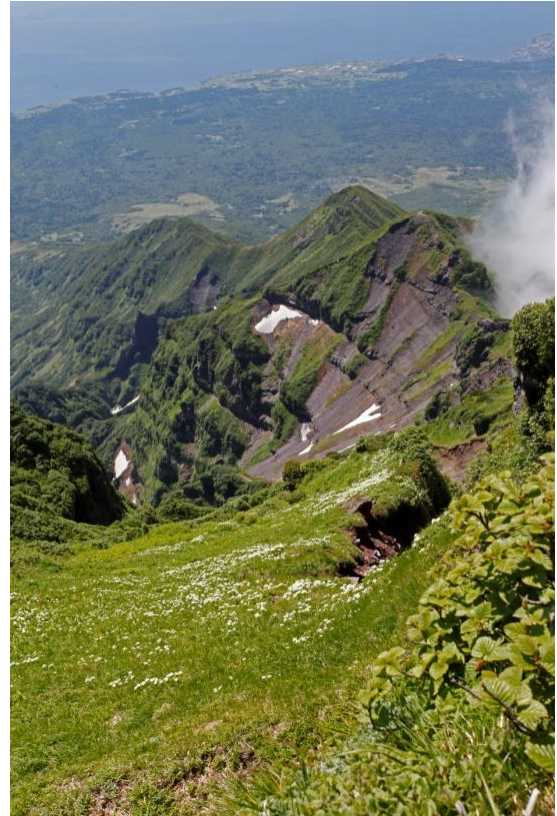


頂上より対岸のサロベツ原野を望む



今は、崩落により危険なので立ち入り禁止の南峰

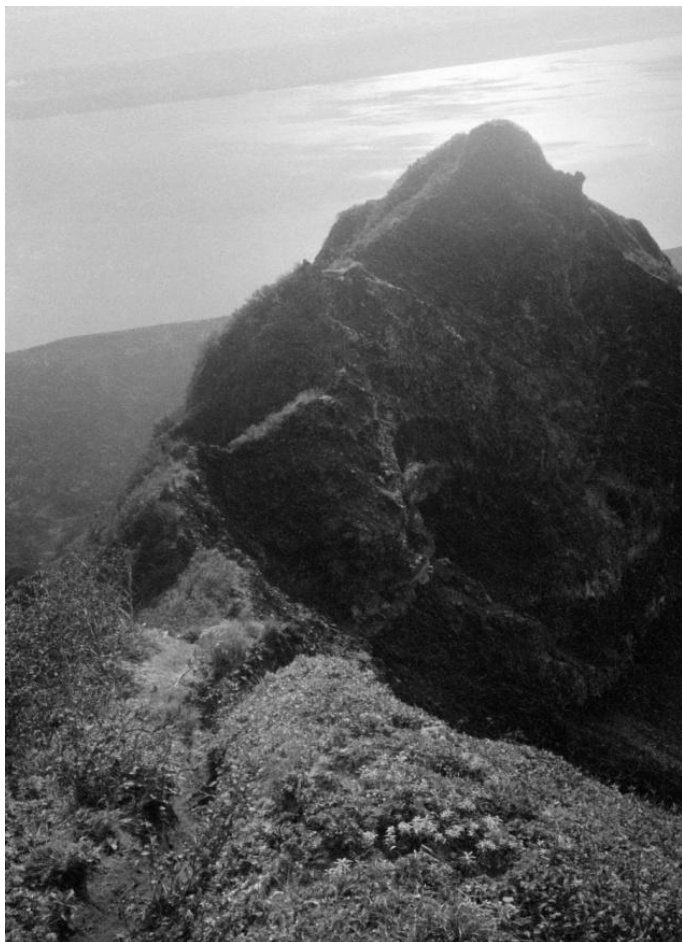
50年前に頂上に立ったとき、頂上付近だけ深いガスで何も見えなかった。人が歩かなくなっても、一度ついた道は消えない ハクサンイチゲの白い花に飾られていた



50年前(左)と今(右) 大地生成の造形性に惹かれて撮ったもの 左の写真の角度から、南峰寄りから撮ったと思える



礼文島が眼下に望まれる。10年前はこの方向にサハリンが見えたが、今回は水平線上の空気が不鮮明なため、ほんの微かにしか見えなかったが、写真には写らない。



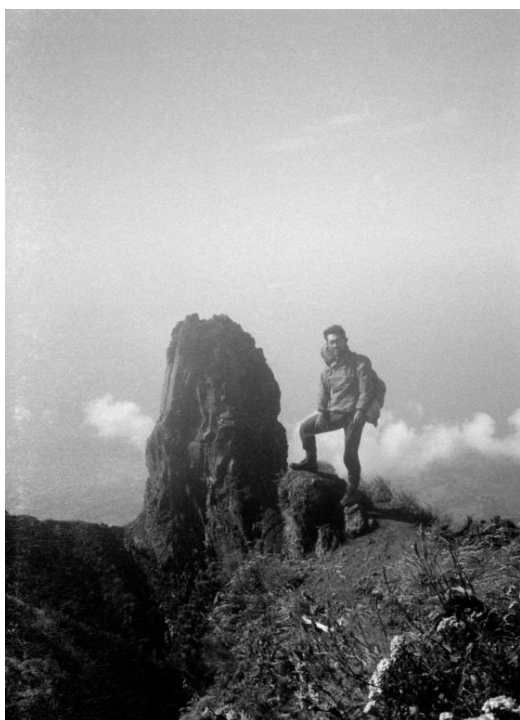
50年前の南峰(本当の頂上)



今の南峰 左の写真は右上の尾根から撮ったと思われる



長官山にある石碑 昭和八年、どうやって上げたのか



この写真は今の頂上(北峰)と思われる

7月7日(木)

「ゆ〜に」キャンプ場―鷺泊港～ハートランドフェリー～稚内港―D254―野寒布岬―D106
―稚咲内―D444―サロベツ原生花園―D444―D763―梶原宅―夕来―D106―抜海

ばっかす

(92km)

若者のように夢を追い求める老人

今日も快晴。朝一番の船は観光客でほぼ満室だったので、船尾の甲板の椅子に席を確保した。出港してしばらくは利尻山が見送ってくれたが、外洋に出たら寒くなり、陽の当たる場所に移動した。

サロベツ原生花園のエゾカンゾウが花盛りのはずと行って見たが、全く見当たらない。ここにも異常気象の影響が現れているのだろうか。見渡す限り地平線まで花のない湿地帯の草原だ。昔の映画「人間の条件」のロケ地になったくらいで、人工物は見当たらない荒野も、それはそれでよいのだが、以前との変化が気になる。食堂の人が「遅霜にやられて全滅した」と言っていたが、そればかりが原因ではないような気がする。エゾカンゾウの株そのものが無いのである。

午後に、二年ぶりに梶原さんを訪ねたが、相変わらず精力的に活動しており、「サロベツまきば」構想の実現に向けて、国に働きかけながら準備を進めていた。八〇歳を過ぎても大きな夢を持ち続ける生き方は、人間としての理想的なものである。30年以上前から、サロベツの治水対策に取り組んで、その延長上に、理想とする酪農業を夢見、その実現のために東奔西走している毎日である。国会への陳情、道庁への働きかけなどを根気よく続け、その資料を残しているのだが、いつも自分のために資料を用意してくれている。

資料によると、構想の大前提は、「自然環境を保全する農業に関する事業を行い、豊富町の発展と農業振興の活性化に寄与することを目的とする。」とある。詳細を読んでもみると、これは、豊富町酪農の発展にとどまらず、日本の酪農業の発展をリードするものである。また、これらの構想は二代三代と続いてこそ確立できることを踏まえ、酪農家の嫁対策まで本気で取り組んでいる。こんな夢のある楽しいことを毎日考えていたら、歳をとる暇も無くなってしまふ。自分も、「サロベツまきば」の実現を待ち望む一人である。梶原さんの夢のある話に夢中になっていたら、3時間も経過していた。訪問してすぐに、奥さんに「コーヒーと牛乳とどっちがいい」と聞かれたが、酪農家に来てコーヒーということはないと、牛乳をいただいたが、今朝の搾りたての牛乳は、市販の牛乳と比べると濃厚でおいしい。しかし、おいしいからと飲み過ぎると、慣れないお腹が大変なことになるので、おかわりは一杯だけにした。その代わりに、帰るときに2Lのペットボトルでいただき、今晚の宿の「ばっかす」で頂くことにした。

「ばっかす」に着いた時、強風が吹き荒れ、予定していた今晚のバーベキューは中止と思っていたら、もう炭をおこして準備をしていた。普通だったらバーベキューができる状態ではないほどの強風だったが、オーナーが意地でもやるという心構えだった。結果的には記憶に残るおいしいバーベキューになった。

夜の二次会はいつものように宴会となったが、梶原さんから頂いてきた牛乳を皆で飲んだ。この牛乳での焼酎割がなかなかおいしかった。自家製の今年のサルナシ酒も好評で、用意していった500mmのペットボトルは空になった。利尻山の疲れと筋肉痛がひどく、先に寝ることにした。



サロベツ原野を走る道道 106 号線 右が日本海、左は原野。この直線路も空に溶けこむ



ハナショウブが申し訳なさそうに咲くサロベツ原生花園



梶原さん夫妻と記念写真



サロベツの酪農家と放牧牛 右側に梶原さん宅が見える



強風の中、強行したバーベキュー それだけに美味しさも格別だった



この日の同宿者達で出発のセレモニー バイクは二人、あとはレンタカーと公共交通機関

7月8日(金)

「ばっかす」—D106—夕来—サロベツ原野—D763—広域農道—D444—豊富—R40—音威子府—名寄—R239—下川—D101—岩尾内ダム—D101—愛別—R39—層雲峡温泉

ホテル雲井 (305km)

昨日の風が、更に強くなっていた。この風では、当初予定していた海岸線を走るのは無理のようだ。オーナーも、「道道 106 号線は天気良ければこれ以上ない快適走行ができるが、ひとたび荒れると潮風をまともに被ることになるので、内陸を走った方がよい」と言っていた。それでも、行けるところまで行って判断することにして、走りだした。しかし、海からの横風は思いのほか強く、夕来からサロベツ原野を横切って国道40号線に出ることに変更したが、初めてのルートなので太陽の位置と勘で判断して走った。

このように未知のルートを自分の頭の中のナビゲーションを頼りに走るのはすごく楽しい。予想通り豊富に出て、国道40号線をひたすら南下したが、風は少し弱まって走りやすくなった。幹線道路の走行はおもしろくないので、名寄からさらに内陸に入り、交通量の少ない下川から愛別への道を走った。約 60kmに及ぶガソリンスタンドもない、民家もない山道を走っていると、バイクでは珍しく眠気が襲ってくるほどだった。

層雲峡温泉の宿はロープウェイの近くのホテル雲井にした。ここのホテルのフロントには、客を客とも思わないような強烈な個性のおばあちゃん(80オーバー)が一人で切り盛りをしている。従って、周りのホテルが満室でも、ここはほぼ空いているし、ましてや団体客もないし、宿泊料金も安いので、自分みたいに泊まればよいという人には最適だ。ここのおばあちゃんの本音の接客も、客に迎合した接客より気分が良く、口の悪いのも心地よく聞こえてくる。ユースも良いのだが、疲れているときは相部屋でなく個室が良くなる。

明日は黒岳避難小屋に1泊して、愛山溪への縦走を考えていたが、天気予報は、明日だけなんとか良さそうだが、翌日は雨だ。結局、黒岳から50年ぶりの北鎮岳への日帰り登山にすることにした。

7月9日(土)

層雲峡温泉—層雲峡ロープウェイ—黒岳ペアリフト—7合目—黒岳(1984m)—北鎮岳(2244m)

—黒岳—7合目—黒岳ペアリフト—層雲峡ロープウェイ—層雲峡温泉 **ホテル雲井** (7時間)

50年ぶりの北鎮岳(2244m)登山

北鎮岳往復なので、そんなに朝早く出発しなくてもよい。遅く出発したお陰でロープウェイのラッシュアワーが過ぎた静かな山行となった。リフト終点の7合目を過ぎ、すぐに雪渓が現れた。この時期にこの場所で雪を見たのは初めてだ。自分にとって雪上登坂は、月山の夏山スキー合宿で長年経験しているので、夏道ルートに登るより歩きやすいくらいだ。最後の急坂を登り切ると、広大な大雪連峰が目の前に広がった。広い頂上には数名の登山客が思い思いに休憩をしながら雄大な山並みを眺めていた。今日の目的の大雪連峰第2の標高の北鎮岳もよく見えた。夏山の特徴のガスが突然湧いてきて流れ去る様は、写真的にはなかなか良い。黒岳石室に一旦降りて、雲ノ平を登り始めた時、鈴と熊よけスプレーを忘れたことに気がついたが、これだけ登山客がいる中では熊も出てこないだろうと思いついたが、ハイマツの中を通る時は一抹の不安もあった。天気が良いので、旧火口の御鉢平の荒涼とした眺めと硫化水素の臭いに、地球生成

のドラマが想像できた。急勾配の大雪渓を登り切ると北鎮岳の肩に出た。ここから北鎮岳山頂までは30分弱の登りだが、50年ぶりの北鎮岳に特別な思いが湧いてきた。仙台を自転車で出発し、三陸沿岸を北上し、青函フェリーで初めて北の大地に渡り、何日目かで層雲峡キャンプ場に着いた。翌日朝早く、この年に運行開始したばかりのロープウェイには乗らず、層雲峡の柱状節理の中のとんでもない急坂を登り始めた。頭上を通過するロープウェイを見上げて、「この軟弱者めが！」と思ったことがハッキリと思い出された。黒岳、北鎮岳、旭岳、北海岳をほぼ走り抜け、その日のうちにキャンプ場に戻った無謀な山行に、若かったなあと、同時に、とてつもない体力と気力が懐かしく思い出された。今で言うトレイルランをしていたのである。そんな想いに耽っていると、若い女性のハイテンションな声が大雪渓から響いてきた。なんと、標高2000mを超える大雪渓にスノーボードを担ぎ上げ、滑ろうとしていた女性が2人いた。残念ながら瞬く間にガスに覆われて滑るところは見られなかったが、はしゃぎ回る声だけは響いてきた。山での声は遠くまで響く。リフトを降りてから4時間あまり、ボードとブーツにその他の荷物を入れたザックを担いで登って、滑るという狂気じみた発想に感動した。

北鎮岳山頂は50年ぶりだが、記憶にある小さな祠はなかった。大雪山系の山は、ほぼ毎年登っていたが、北鎮岳を通るルートは今までなかった。50年前、濃いガスに覆われ、祠の前でしゃがみ込んでガスが切れるのを待っていたのだが、今日も同じようにガスに覆われていた。頂上には先客の若い女性2人がいて、「ずっと同じでしたね」と愛想の良い笑顔で話しかけてきた。思えばロープウェイから同じで、常に自分より前を登っていた。七合目のリフトを降りてから4時間あまりかけて登ってきたのだからなかなかの健脚だ。札幌から来たという30歳前後の2人は、よく山に登りに来るそうだ。北海道の山に限らず、登山中に会うのは中高年の人達が断然多く、このように魅力的な若い女性と会うことは少ない。50年前のことを話したりしながら一緒にお昼を食べ、しばらく頂上での一時を楽しんだが、あいにくのガスが流れ込んできて視界を遮ってしまうので、2人の女性は下山し始めた。ガスに霞むお鉢平をバックに下山する女性2人の姿が絵になるので、写真を撮らせてと声をかけた。実際は意識していないうちに撮ってあったのだが、そんなこんなで、また少し話しているうちに、瞬く間にガスが流れ去り、大雪連峰の主峰旭岳から裾合平にかけての見事な縞模様の雪渓、さらにその奥には去年、嵐のためにテントから一日中出られなかった体験をしたトムラウシ山まで鮮明な景色が広がった。右手には今回計画していた愛山溪方面の山並みが続き、振り返れば今登ってきた黒岳、そして北海岳、白雲岳が北鎮岳を中心に広がっているように見える。ここまで登ってきた甲斐があったというものだ。2人の女性も「ナニコレ！」と感極まったような声をあげ、興奮気味だった。絶景を十分に堪能した2人の女性は、「おかげですばらしい景色を見ることができました」と、両手を合わせて感謝し、下山していった。自分はこの景色の中にいつまでもいたい気持ちに駆られ、時間的にも余裕があったので、写真を撮りまくった。そして、来年こそ、愛山溪の縦走を実行すると決め込んだ。

大雪渓の急斜面を降りながら、スノボの2人はよくこの斜面を滑ったものだと感心した。急斜面の終わりはすぐに岩場になっているので、転んで流されたら危険な斜面だ。まだ微かに残っているシュプールを見ると、最後はショートターンで終わっているのだから、それなりに力のある人達なのだろうと思った。

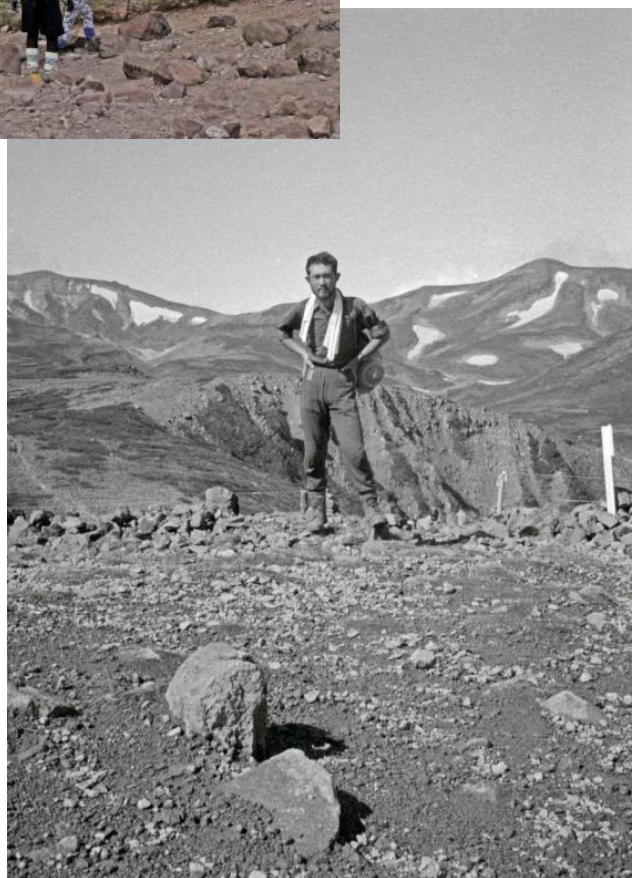
陽が傾いて気温も下がり始め、黒岳から、満ち足りた気持ちで快適な下山を楽しんでいたら、前方から賑やかな女性の声がしてきた。ヘアピンコーナーを曲がると、スノボを背負った2人の女性がいた。「あんな馬鹿げたことをしていたのはあなた達だったのか！」と声をかけると怪訝そうな顔をしていたが、「こんなバカ

なことをする若者がまだいたことに感激した」と言ったら笑顔で応えた。スノボにブーツ、ザックを背負い、往復7時間もかけて滑りに行くという発想がすばらしい。しかも、あの急斜面の雪渓の雪解け水を飲みながら、登り返して2回も滑ったと言っていた。自分もバカなことをするような生き方をしてきたので、このような若者を目の前にすると嬉しくなる。そして、北海道の山で水を飲んだらエキノコックスの心配があるのではと聞くと、「沢水はダメだけれども、雪渓の雪解け水は大丈夫」と平気な顔をしている。しばし話したあと、写真を撮らせてと言うと、ポーズをとって応え、ウェブ公開してもいいかと聞くと、「イイヨ」と底抜けに明るいファンキーな女性達だった。



点景に入れた人物は、北鎮岳頂上で会った二人だった

黒岳山頂で撮った、今年と50年前の写真は、偶然にも殆ど同じアングルだった 50年前は8月だったので、残雪の量が少ないのと、広角レンズと標準レンズの違いで画角が違う
 上下とも右奥が北鎮岳





この2枚の写真には、スノボの二人が写ってある。 広角レンズしか持っていかなかったので、人物は点でしかない。肉眼では良く見えた。上の大雪渓上にこれからスタートする二つの点がある。下の写真にも、2回目へ登っている二つの点がある。これは、パソコン画面を拡大してはじめてわかった。手前の雪渓は急に落ち込んでいて危険だ。中央奥が黒岳(頂上が見えない)。





50年ぶりの北鎮岳(2244m)頂上



北鎮岳山頂で知り合った、札幌からの登山者



北鎮岳頂上より大雪山主峰旭岳 今年(上)と50年前(右)



旧噴火口・御鉢平



旭岳(右)とトムラウシ山(左奥)



旭岳より裾合平にかけての雪溪の縞模様



愛山溪方面の山並み 比布、安足間、永山岳と続く



北鎮岳頂上のエゾノツガザクラ の群生



雲ノ平のキバナシャクナゲ 遠景は北鎮岳



帰路は黒岳(中央)頂上經由



濃霧の場合は黄色のマーカールが頼り



御鉢平の中の有毒温泉(中央)



黒岳頂上より北鎮岳(左奥)を振り返る 谷から湧きあがるガスが夏山らしい



スノーボードのファンキーガール

自ら、自慢のボードを振り向いて見せてくれた。これだけの荷物を背負って登り4時間、大雪溪を2本滑って、下り3時間、疲れを全く見せないパワーには驚嘆する

7月10日(日)

層雲峡温泉—R39—愛山上川IC—旭川紋別自動車道—比布ジャンクション—道央道—和寒IC—D48—幌加内—R275—沼田IC—深川留萌自動車道—留萌大和田IC—R233—R232—小平

ゆつたり館 (232km)

タチゴケトラブル発生

朝から雨。昨日、黒岳石室に一泊しての愛山溪への縦走をしていたら、今日は悲惨な一日となるところだった。今日は、天候不順の中を積丹半島に一气に行くには無理があるので、留萌あたりまでと決めていたので時間に余裕がある。予報では午後回復に向かうようなので、ゆつくりと出かけることにした。

ハンドルバーの緩みが気になっていたの、上川のGSで給油したついでに、調整することにした。持参の工具で簡単に調整はできたのだが、バイクのスタンドのロックが不完全だったようで、恥ずかしいことにタチゴケをしてしまった。何が起こったかわからないうちにバイクは横倒しになった。1人でも起こせないことはないが、余計なエネルギーは使いたくないので、GSの若い人に手伝ってもらって起こし、エンジンをかけようとしたがかからない。キャブに余計なガソリンが入ったためだろうと、少し時間をおいてもかかる気配がない。いつも世話になっている仙台の「Vツイン」に電話をして状況を話し、その指示の通りに作業をすることにした。雨が激しくなってきたので、GSの屋根の下を借りて、プラグを抜いて、セルモーターを回し、シリンダー内のガソリンを吹き飛ばした。キャブの燃料噴射とプラグの火花も確認して、もう大丈夫だろうと思ってセルを回したが、やはりかからない。こういう時は焦っても仕方がないので、冷たい飲み物を飲んでからもう一度プラグを抜いて、プラグの掃除を徹底的にした。さらに、GSの人がプラグクリーナーを吹き付けてくれた。これでダメだったらJBRのロードサービスを頼むしかないと思いながら、神に祈る気持ちでセルを回したら、頼もしい爆発音を轟かせてエンジンは蘇った。約1時間のロスタイムだったが、GSの屋根を貸してもらい、最悪の場合いでも場所が場所だけに、心配がなかったので安心して作業ができたのは幸運だった。ほんのちょっとした不注意が招いたトラブルだった。

相変わらず雨は降っていたが、気持ちは余裕をもって走ることができた。和寒から幌加内までは初めての道で、両側に広がるカボチャ畑を眺めながらの走行となった。自分のカボチャ畑は、ほぼ収穫を終えていたが、ここは苗を植え付けたばかりだった。そして、マルチの幅が自分のよりかなり狭いことに気がついた。自分の畑の回りのマルチも狭かったのだが、保水のことだけを考えて広いマルチにしていた。しかし、そのことが逆に根が高温で焼ける原因になり、早く枯れかかってしまったことに気がついた。マルチが必要なのは植え付けた直後だけで、あとは雨水が十分行きわたれるくらいの狭さのマルチで良かったのだ。

幌加内経由を考えたのは、幌加内でソバを食べたいからである。日本のソバの生産量の半分近くは北海道産で、その北海道の殆どが幌加内で栽培されている。R239 とR275 の交差点にある、人気のそば屋「霧立亭」は遠いので、町内で目にした手打ちそばの「あじよし食堂」に入った。店は田舎の食堂という感じで雑然としており、店内は地元の人達だけだった。冷たいとろろソバを頼んだが、店内の雰囲気とは裏腹に、期待通りの旨さだった。雨も止み、一面そば畑の空知国道を走り、沼田より高速道に乗って留萌で降り、小平の公共の宿・あつたまり館に宿をとった。

7月11日(月)

小平-R232-留萌-R231-雄冬-浜益-石狩国道-R337-銭函-R5-小樽-余市-R229
-古平-雷電国道-余別 一神威岬-余別

積丹YH (232km)

このカラスは質が悪い。バイクに積んであったウエダーのビニール袋を食いちぎってある。恐らく、魚の臭いが付いていたからだろうが、ウエダーに穴が開いていなかったのが幸이었다。

初めて走る陸の孤島と言われた雄冬海岸は、道路は新しく立派だが、トンネルの連続で、景色はほとんど見ることのできない単なる通路になってしまった。

浜益の海水浴場に寄ってみた。若かりし頃、娘2人を連れてキャンプをした思い出の場所だが、当時の面影はまるでない立派に整備されたキャンプ場を併設した海水浴場になっていた。丁度キャンプをしていたとき、海岸の湿地帯に死体が発見される事件が起こったが、その湿地帯も今は綺麗な芝生になっていた。その当時は、浜益から北へ行く道路はなく、雄冬海岸は未知の魅力を秘めた陸の孤島だった。それ以降、ここを通る機会がなく、今回初めて走ったが、未知の魅力は興奮めに終わった。

石狩川の河口にある佐藤水産のサーモンファクトリーは魚好きの自分には目の毒だった。欲しい、食べたい食材が有り過ぎた。買っても仕方ないから、2階のレストランで昼食を食べることにした。ここでもウニ丼を食べたが、ムラサキウニにしては旨かった。勿論、獲れたての新鮮なウニだった。



浜益海岸 海岸へと続く足跡の無い道は、東山魁夷の「道」だ



鮮度抜群の「オールドリバー」のウニ丼



佐藤水産のサーモンファクトリー

その後、ひたすら積丹半島を目指して走った。今日の宿は積丹YHだが、その目的は、YHでウニをふんだんに食べられるからである。漁師の経営しているYHで、獲れたてのウニを安価に提供してくれるのだ。到着してすぐに、夕食の時の焼きウニを頼んだら、女性のペアレントが両手を合わせながら頭を下げて、「ごめんなさい。時化が続いてウニがないんだ」と平謝りをしている。それは自然相手だから仕方が無いので残念だが諦め、明日帰る時でいいから「ミミコ」くださいと言ったら、またまた頭を下げて、「ミミコもなくなっただんです。ごめんなさい。今年は予想以上に買って行く客が多くて、今年分は無くなってしまった。来年の春に電話をしてください」と言っている。ミミコとは方言でホトケノのなんとやらという海草を天日干したもので、味噌汁などに入れるとすこぶるおいしい。去年は1個だけ買って行ったが、あまりにも美味しいので5個を取り寄せ注文したくらいだ。このYHにわざわざ来た目的が無くなったが、「明日の朝はウニ漁ができそうなので、ウニ剥き体験はできると思う」と言っていたので期待した。その代わりと言えば語弊があるが、その日の夕食はウニのない分、他のもので有り余るものだった。サクラマスの刺身、サクラマスの焼き物、カレイの揚げ物、タプリのシラス、ワラビの煮付け、そしてナマコの酢の物まで出してくれた。ナマコの酢の物だけで1500円はするそうだが、YHの夕食代は1300円だ。そして、「ウニ漁が、時化で4日間も出られないのに、ウニ丼を出している店があるのはおかしい。ウニは冷蔵庫で保存しても3日が限度。ウチはミョウバンを使っていないから」と言っていた。余別漁協では天然のウニをミョウバンなしで出荷しているが、市場に出回っているウニの殆どはミョウバンを使っているらしい。サクラマスの刺身は食べたことがなかったので、「虫は大丈夫か」と聞いたら、一度冷凍にしてから刺身にしたから大丈夫と言っていた。これは美味だった。ワラビもペアレントが熊のウジャウジャいる余別岳に1人で行って採ってきたと言っていたので、熊は怖くないのですかと聞いたら、「私は熊よけのオーラを発しているのだから、熊は近づいてこない」と豪語していた。いずれにしても普通のYHの食事ではない。今日の部屋には横浜からのFXDBのバイクの人と一緒に、旅談義とバイクのことで話しをすることができた。FXDXまでは知っていたがDBは初めてだった。



積丹ユースホステルの夕食。時化でなければ、これにウニがつく

余別の造り酒屋が作っていた神威鶴 飲兵衛が喜ぶ酒だ



7月12日(火)

積丹YH-R229-神威岬-岩内-D66-ニセコパノラマライン-ニセコ五色温泉

ニセコ五色温泉

(151km)

ウニ剥き体験

今朝の朝食のホッケの煮付けも美味しかった。今年は、北海道のホッケは脂の乗りが悪く、あまり良くないと言われていたが、ここで捕れたホッケは脂がのって旨い。漁師が経営しているYHならではのものだ。朝食後、ウニ漁の船が帰ってきたので、期待通りウニの殻剥き体験ができることになった。漁協に出荷される前に、ウニ剥き体験のためのウニを確保してきたと悪戯っぽく笑いながら、ウニの剥き方のレッスンが始まった。勿論、剥いたウニは自分で食べられる。一個のウニから5片のウニがとれる。「タベは時化のためウニをだせなかったので、お詫びに今朝は2個のウニを剥いていいよ」と気前が良い。海水の塩味が効いて味が濃く、いつまでも口の中に味が残っている。わざわざ来た甲斐があった。



ウニ剥き体験

ユースのペアレントとFXDBの男



剥きたてのウニ



積丹ユースホステル



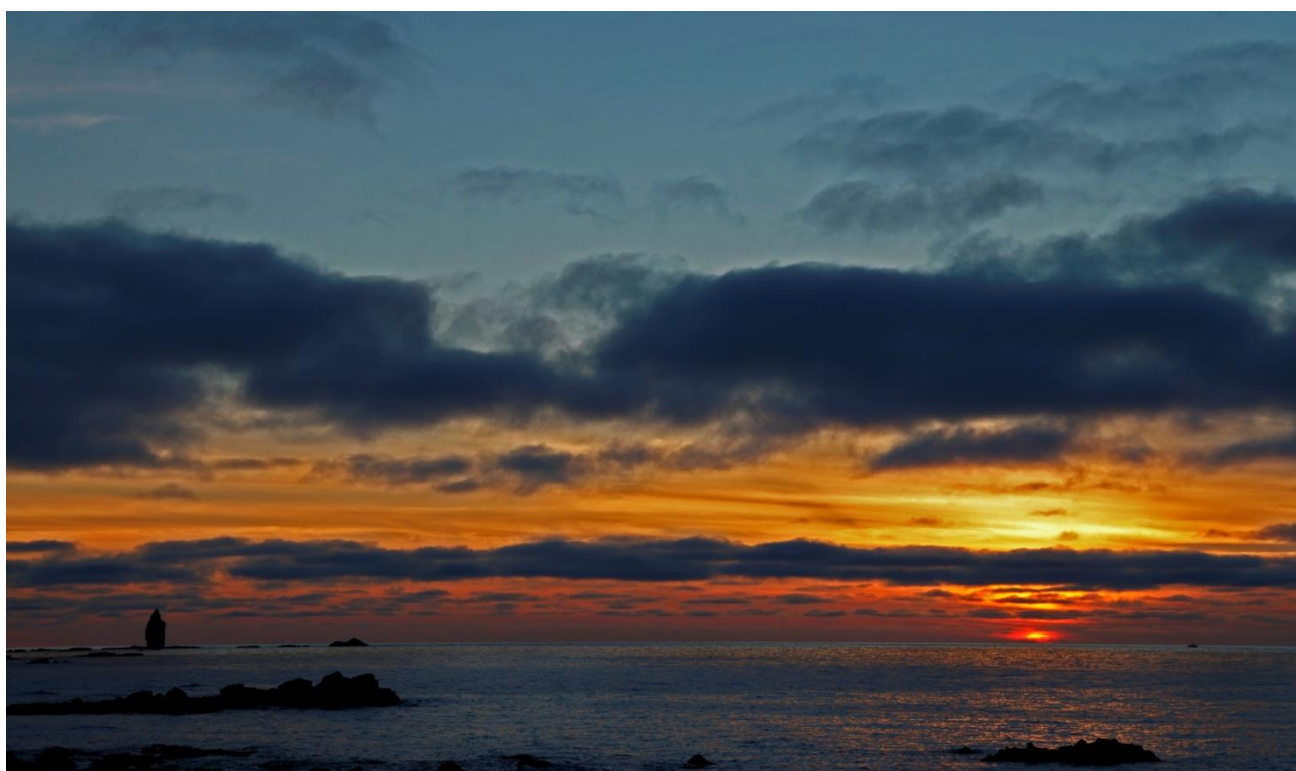
巨大なムラサキウニ

ベテランウニ漁師 このムラサキウニは天然の昆布を食べているので、良質のウニとして知られている

神威岬に積丹ブルーを求めて走った。ここはいつ来ても風が強い。折角の積丹ブルーがさざ波の反射に邪魔されて、青の色が白っぽくなってしまった。この青は海の白い底石が原因のようだ。雄冬海岸同様に積丹半島の海岸線道路はトンネルだらけで、景色を眺めながらの走行はできないので、一気に岩内まで走ってしまった。この道の駅ほど訳の分からない所もない。道の駅にはトイレが付きものだが、ここは少し離れた公園のトイレを使い、食事処もかなり離れた所に目立たないようにある。道の駅の隣にあって、道の駅とは関係ない焼き魚定食屋に入った。ここで食べたニシン定食は美味しかった。

すっかり天気が回復したニセコパノラマラインを快適に走り、時間に余裕があったので神仙沼の散策も楽しめた。沼の手前の湿地帯にはワタスゲが花盛りだった。観光客のいない神仙沼は静寂に包まれた秘境の趣がある。昼寝をしたら気持ちよさそうだ。

ニセコ五色温泉には早めに着いてしまった。ここの温泉も子供達を連れてキャンプに来て入った所だ。当時の露天風呂は混浴だったが、今は男女別になっている。硫黄泉の露天風呂に入りながら、ニセコアンヌプリを飽きる事無く眺められる。しかし、不思議と登山意欲は湧かない山だ。よく見ると、頂上近くを登っている1人の登山者が見えた。白い服を着ていたため西日に映えてよく見えたが、こんな夕方に登って大丈夫なのかと気になった。



神威岬の日没 残念ながら、水平線上の雲のため、最後の瞬間までは見られなかった 左には神威岩



神威岬 神威岩の積丹ブルー



神威岬 この先端に灯台が有り、神威岩と続く 往復40分



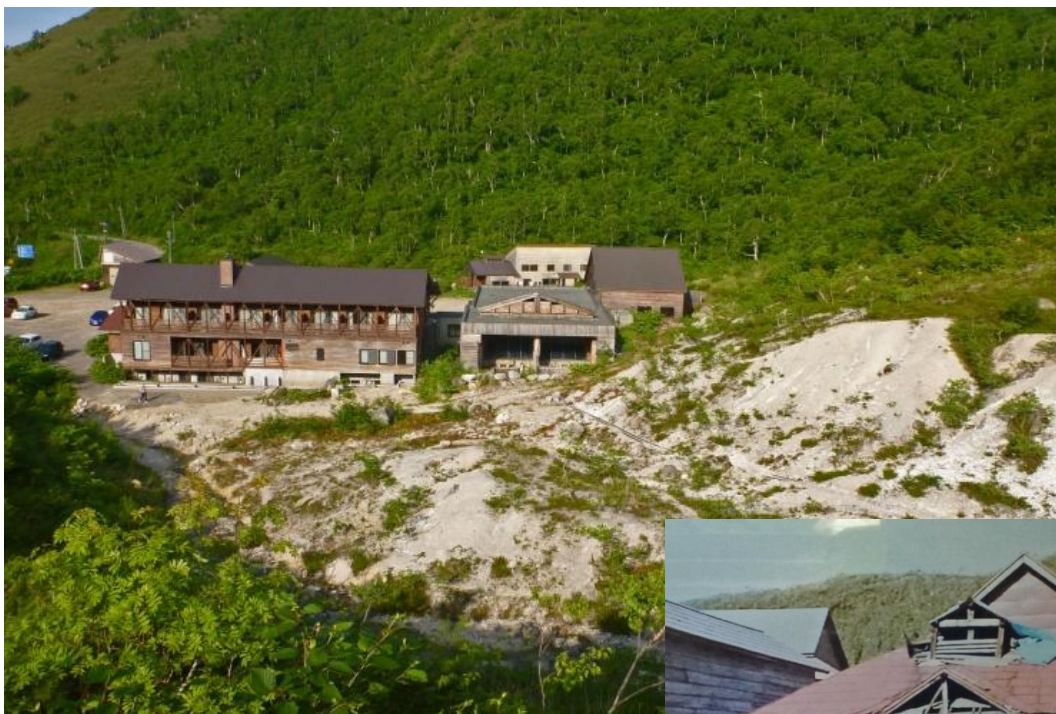
神仙沼の手前の湿地帯のワタスゲ



神仙沼



ニセコ五色温泉の露天風呂 背景はニセコアンヌプリ(1308m)



ニセコ五色温泉全景 右の建物が露天風呂

40年前頃の混浴露天風呂(五色温泉写真資料)



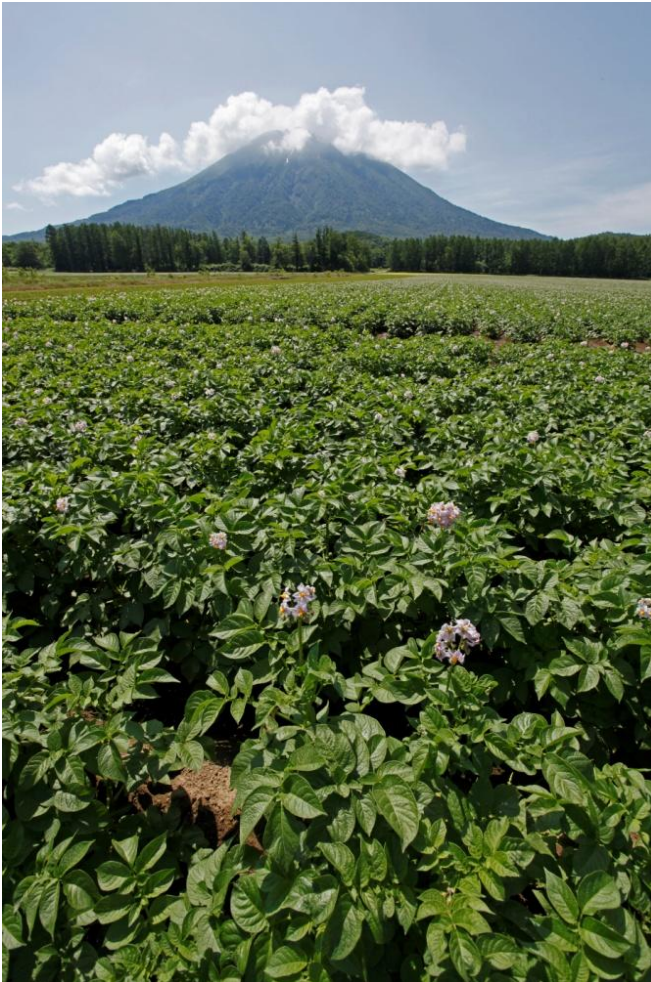
ニセコ五色温泉



源泉湧き出し口

7月13日(水)

ニセコ五色温泉-D58-R5-D478-ふきだし公園-R276-支笏湖-D16-千歳
-R36-D259-苫小牧フェリーターミナル ~太平洋フェリー「きたかみ」~ (145km)



早朝の散歩で、展望台から五色温泉を眺めた。露天風呂が丸見えだ。イワオヌプリに登ろうかと思ったが、あまりにも天気が良すぎて暑く、中途半端な登山はしたくないという気持ちが強くなり、そのまま露天の朝風呂に入った。大阪からの人が入ってきて、しばし話し込んだ。2泊3日の予定で、この温泉に入るために来たと言っていた。「交通費が勿体ないですね」と言うと、「ピースの格安料金だと、大阪、千歳が3000円なので、レンタカーを借りても3日あれば十分だし、時々借りているとレンタカー料金もかなり安くしてもらえると」言っていた。なるべく会社を休まないようにして、来る回数を多くするのだと話していたが、いろいろな旅のスタイルがあるものだ。

羊蹄山は頂上付近に雲がかかっていたが、その麓に広がるジャガイモ畑は花盛りだった。ふきだし公園はビックリするくらい観光客が少ない。いつ来ても大型観光バスが数台も止まっていて、観光客相手の店は大繁盛しているのに、閉店している店もあった。観光事情が変わったのだろうか。支

笏湖のソバ屋でお昼を食べ、千歳川の本田さんに会いに行くことにした。この時間から訪ねても、フライの練習をする時間は中途半端になるが、顔を見るだけでもと思い、そして、おいしいコーヒーを入れてくれるだろうと寄ってみた。バイクの音で飼い犬が吠え、本田さんが「時期的にそろそろ来る頃だなと思っていた」と顔を出してきた。1年ぶりなのだが、本田さんのブログを見ていると、その人となり身近に思われていたので、ブランクを感じさせなかった。挽き立てのコーヒーをご馳走になりながら、いろいろなことを話したが、本田さんの関心は多方面に及び、話題も豊富だ。自分の生き方とオーバーラップする部分が多くあり、考え方がよく理解できる。

本田さんは、今は建築をやっているが、高校生の頃は美術を志し、美大を受験したことも初めてわかったが、自分のように消去法で美術の大学に入学したのとは大きな違いがある。学生時代に利尻島で1ヶ月くらいテントを張って放浪していたようだが、当時の若者の中には良く見られた傾向ではあったが、今の若者にはそのような行動パターンはあまり見受けられない。話しは尽きないが、フェリーの時間が気になってきたので、結局、フライフィッシングの練習もしないまま走り出した。

フェリーターミナルが近くなった国道36号線で、子供自転車を積んだサイドカーがふらついた走りをしてながら前を走っていた。大きなヘルメットをかぶった小さな子供をおんぶしている。福島ナンバーなのに、フェリーターミナルに左折するところを真っ直ぐに行ったので、まだこれから旅を続けるのだらうと思っていたら、自分がターミナルに着いて乗船手続きを終えてバイクに戻ると、自分の後に止まっていた。旅行中にメロンを買いすぎて、メロンでサイドカーが一杯になったので、子供をおんぶしたら、荷重オーバーになったのか、後輪のベアリングがおかしくなってまともに走れなくなったと言っていた。自分もベアリングのトラブルにあったことがあるので良く分かるが、まともに走れなくなる。「仙台から郡山に帰るのだが、高速は走れないので大変だ」と言っていたが、フェリーは仙台着10時頃なので、国道4号をユックリ走っても明るいうちに郡山までは着くだろう。それにしても、子供は小学校1年生と言うことだが、まだ夏休みには入っていないので、前倒しの休みを取ったのだろうか。どうやらこの親子は普通の常識の枠外で生きているように思えた。もう1人目に付いたのは、オープンカーの三輪車である。近づいて見るとエンジンはモトグッチの空冷エンジンを搭載していた。エンジン丸出しのフロントはクラシックカーの雰囲気がかっこいい。持ち主もこだわりのありそうな人だった。写真を撮らせてくれと言ったら、「バイク以上に雨が降ると運転席が水浸しになって大変なんだ」と言いながら、「自分も前はバイクで旅をしていたが、体力的にしんどくなってこれにした」、と話してくれた。



載していた。エンジン丸出しのフロントはクラシックカーの雰囲気がかっこいい。持ち主もこだわりのありそうな人だった。写真を撮らせてくれと言ったら、「バイク以上に雨が降ると運転席が水浸しになって大変なんだ」と言いながら、「自分も前はバイクで旅をしていたが、体力的にしんどくなってこれにした」、と話してくれた。

カワサキのサイドカーの親子

モトグッチの三輪オープンカー



7月14日(木)

～太平洋フェリー「きたかみ」～仙台港フェリーターミナル～東部南部自動車道～自宅

(25km)

フェリーターミナルから自宅まで、去年のような大渋滞もなく、予定通り無事に帰ることができた。「とかち」はバイクの音を聞きつけ、ドアの所で待っていた。しかし、去年のように過呼吸になるほどの興奮ではなく、「どこへ行ってたんだよ！」と、とがめるような仕草でじゃれついてきた。大人になったようだ。

総走行距離(バイク)	2060km
車	220km

今回の旅は、天候不順の中ではあったが、天気予報を頼りに行動したため、雨で大変な思いはほとんどなかった。毎年感じていたが、北海道の気候は確実に変化してきている。これは、北海道に限ったことではなく、日本全体にも言えることだが、自分は毎年、ほとんど同じ時期に北海道に行っているのだから、その変化が感覚的に感じられる。気候の変化は人間社会の変化に及び、人間の考え方で影響を受けているはずだが、通りすがりの旅人には、その変化までは分かりづらい。「北海道は梅雨が無い」と言われてきたが、それはもはや死語になりつつあるということは実感できる。

道北の内陸を走ってみると、集落の変化はほとんど見られないが、一日中、車が通らないような道路も、年々立派になっていくのも不思議な現象に見えた。綺麗に整備された道路を走るのには、安心感があって疲れないが、昔からの古い道路には、その地域の歴史が染みこんでいるような味わいがあり、走りながら自分勝手な想像を巡らす楽しみがあったが、真っ白なガードレールの続く道からは感じられなくなった。

自分の実家のある東北地方もそうだが、ここ数年に増えた風力発電の風車と太陽光発電のパネルの増加は、北海道の景観にも影響を与えている。ガードレールの無かった 106 号線にもガードレールの部分が少し増えたと思ったら、数えきれないほどの風力発電の巨大な風車が道路沿いに出現した。それをバックに記念写真を撮っている旅行者を見かけるが、何も無い道が続いているほうが、はるかにインパクトが強かった。宗谷丘陵もしかりで、波打つ周氷河地形の丘陵をバイクで走っていると、丘の頂上から突然現れる巨大な風車には、怪獣が出現したかのような驚きを覚えた。以前のように、人工物は何もなく、熊の恐怖を感じながら走った道を知っている者からすれば、大きな違和感を覚えるのだが、知らない人からみれば、それも一つの風景として自然に映るのだろうか。

去年の高山植物の開花も、理解不能な現象が見られたが、今年は、過去にないくらいの残雪の多さだった。一見、温暖化現象とは相反するようだが、5月と6月の異常気象による低温が雪解けを遅らせたようだ。去年の3泊4日の縦走が、今年の残雪だったら恐らく不可能だったと思われた。

大きく見れば、確実に温暖化は進んでいるのだけれど、その影響なのか、最近の北海道は低気圧の発生が異常に多い。今夏の北海道の甚大な台風被害は気の毒で、収穫目前の作物の悲惨な状況を見た時の、農家の心境を思うといたまれな気持ちになる。中富良野、南富良野周辺は災害とは無縁の地域だったのに、あのようなゲリラ豪雨は想像できなかったに違いない。

北海道の大陸的な安定した気候は、もう望まれないのだろうか。

